

Seinan Gakuin Glee Club 100th anniversary

百年の歩み

1919～2019



西南学院グリークラブ



西南山の家 暖炉

「百年の歩み」発刊にあたり

今般、西南学院グリークラブ創立100周年記念誌「百年の歩み」を発刊するにあたり、ご協力頂きました関係各位に心よりお礼申し上げます。

大正8年(1919年)のグリー創立から、100年という長い歴史の中で紡いできた幾多の演奏会や、その間の部員のひたむきな努力の数々を検証し、築かれた歴史と伝統を改めて認識すると共に併せて後世への礎とする作業に携わることが出来たことは、編纂委員として無上の喜びでもありました。

これまでグリークラブには、創部から昭和34年迄の40年間の活動詳細を記した「四十年の歩み」が、唯一の記録史書として昭和35年に発刊されていましたが、当時は発行部数も少なくまた現在は新たに入手することも出来ないため、平成30年に「西南学院グリークラブOB会ホームページ」に電子版として掲出させて頂きました。

その間、創立60周年や70周年の節目に、記念誌の発刊を試みた経緯が数度有りますが実現に至らず、当時収集した多くの関係資料もその後のクラブの変遷の中で散逸してしまいました。

今回の100周年記念誌発刊に関しては、平成22年頃から計画に着手していましたが手元に残された資料類が余りにも乏しいことや、コロナウイルス禍で大学内における編集作業も数度の中断を余儀なくされるなど作業は難航しました。

また、これまで西南グリーをご指導頂いていた合唱界の諸先生方の多くが他界され、直接にお話を伺うことも叶わず、改めて西南グリーが辿った歴史の長さを知ることになりました。

本書は3部構成とし、第1部は既刊の「四十年の歩み」記載部分に関し、創部1919年から創立40周年(1959年)までの経緯を年度ごとに概略記載、第2部の創立41年目(1960年)以降の歩みに繋げ、100年の歴史を述べています。特に、先の大戦と平成18年の2度の休部前後の詳細記述に留意しました。第3部はグリーの歴史の中で特に関わりの深い先輩方の動向や思い出、更に「いざ起て いくさびとよ」の起源や西南グリーとの関わり等を紹介し、併せて、OB合唱団西南シャントウールの小史を記載いたしました。

限られた時間の中で十分な調査検証もままならず掲出漏れもあろうかとの懸念も残りますが、西南グリーの100年間の活動実績だけは本書に残し得たと思います。

今後とも西南学院の発展と共に、西南学院グリークラブが歩み続けることが出来ることを願い本書を上梓致します。

西南学院グリークラブ創立100周年記念誌編纂委員会
鈴木 勸(62期) 河野 正海(63期)

西南学院グリークラブ創立100周年記念誌
百年の歩み

目 次

「百年の歩み」発刊にあたり		「百年の歩み」編纂委員会	
エール	・ 西南学院校歌	8
	・ Ah Seinan !	10
	・ She Wants Brave Noble Men	12
「百年の歩み」発刊のご挨拶			
	西南学院グリークラブOB会	会長 黒江 量二 17
祝 辞	西南学院大学	学長 G.W.バークレー 18
祝 辞	西南学院大学同窓会	会長 岩崎 文正 19
祝 辞	西南学院大学文学部	教授 武井 俊詳 20
		(西南学院グリークラブ部長)	
第1部 創立から40周年までの概要 21			
1. グリークラブの誕生～大正時代の活動 23			
2. 昭和初期の活動 26			
3. 戦時下のグリークラブ～昭和18年最後の演奏会 30			
4. 戦後の復興から創立40周年へ 33			
(1) グリーの再興と石丸 寛 氏との出会い			
(2) 朝日合唱コンクール初優勝			
(3) カレッジソング「Ah Seinan !」の誕生			
(4) 独立演奏会開催と全日本合唱コンクール初入賞			
(5) 西南シャントウールの誕生			
(6) 創立40周年記念演奏会の開催			
第2部 創立41周年から100周年までの歩み 51			
1. 卒業年度別の活動 53			
「創立41周年(昭和35年)～創立86周年(平成17年)」			
2. OB会の誕生とグリークラブ再興支援活動 151			
「創立87周年(平成18年)～創立89周年(平成20年)」			
(1) OB会の誕生			
(2) 休部から復活へ			
(3) 「ありがとうランキンチャペル」			
(4) 復活への熱い願いと活動			

3.再興グリークラブの活動開始	161
「創立89周年(平成20年)～創立100周年(令和元年)」	
(1) 再興グリー復活から創立90周年	
(2) 定期演奏会の再開	
4. 海外演奏旅行への取り組み	173
(1) 概要	
(2) 軌跡	
(3) 旅行記	
5. 創立90周年記念グリークラブフェスティバル開催	193
(1) 記念式典	
(2) 演奏会を聴いて 吉田 浩(63期)	
(3) 寺園院長のメッセージ	
6. 創立100周年記念グリークラブフェスティバル開催	201
(1) 「百年の歩み展」	
(2) 記念フェスティバル	
(3) 客演指揮者小久保大輔氏のメッセージ	
(4) 記念演奏会に参加して～若手グリーメンの感想	
(5) 記念演奏会を聴いて	
(6) 創立100周年関係の新聞報道	
第3部 グリーメンの足跡	223
1. 西南学院グリークラブを支えた人々	225
(1) 西南グリーが紡いだ音楽の系譜	
(2) 思い出の記	
2. 歌は時空を越えて	235
「いざ起て いくさびとよ」 内海 敬三(54期)	
3. OB合唱団の歩み	245
(1) 西南シャントウール	
(2) 西南グリーOBシンガーズ	
(3) 西南学院グリークラブ東京OB会・関西OB会	
4. 私のグリー時代	271
(1) 幻の60周年誌に寄せて	
(2) 100周年誌に寄せて	
5. 資料編	293
・年表	
・定期演奏会の歩み	
・コンクールの歩み	
・OB名簿	
・愛唱歌 「さよならね」	
あとがき	316

Seinan Gakuin Glee Club 100th anniversary

エール



西南学院校歌

水町 義夫 作詞
 島崎赤太郎 作曲
 石丸 寛 編曲

Strong ♩ = 112

mf

1. き し を あ らう 紺 ペ き の な み ま
 2. 理 想 に 燃 ゆ る 子 等 が あ お ぐ つ
 3. は る け き か な わ が 行 く み ち さ

mf

5

つ の み ど り 青 し ゆ ん の い ろ 希 望 の か
 く の そ ら た し か く き よ し 光 明 の と せ い
 あ れ と も よ 使 め い お も し 起 て よ い さ

f

10

が や き 学 い ん の ほ こ り ぞ こ れ
 め ま い し く 学 学 い ん の の わ ぞ か み き 子 子 等 ね よ

mf

14

せい 南 わ あと かい わ き の 西 が く な ー ん
 せい 南 せい 南 せい 南 わ か き 西 ー な ー ん
 な ー ん 西 な ー ん せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南
 な ー ん 西 な ー ん せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南

f

18

せい 南 わ あと かい わ き の 西 が く な ー ん
 な ー ん 西 な ー ん せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南
 な ー ん 西 な ー ん せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南 せい 南

ff

西南学院校歌

作詞…水町義夫

一、岸を洗う 紺碧の波

松の緑 青春の色

希望の輝き 学院の誇りぞ これ

西南 西南 若き西南

二、理想に燃ゆる 子等が仰ぐ

筑紫の空 高く清し

光明と生命と 学院の望みぞ これ

西南 西南 愛の学園

三、遥けきかな わが行く道

さあれ友よ 使命重し

起てよ勇ましく 学院の若き子等よ

西南 西南 永遠の学院

キリストに導かれた出会い

1920(大正9)年の秋頃、水町義夫は校歌の作詞をし、作曲者を探していた。当時、水町は、若松講義所(現・若松バプテスト教会)から福岡バプテスト教会(簗子町)に転会して来た直後で、そこで同教会員であった不破ヒサ子に出会った。当時、東京音楽学校の学生であったヒサ子の仲介で彼女の恩師であり、キリスト教信仰の上に立つ強い絆で結ばれていた島崎赤太郎(東京音楽学校教授)に校歌の作曲が委嘱された。

曲は1921(大正10)年1月に完成し、水町、島崎という二人のキリスト者の出会いから校歌は生まれた。

島崎赤太郎

島崎は、1874(明治7)年東京・築地で生まれた。1893年東京音楽学校(現・東京芸術大学)専修科卒業、同校の嘱託教員となる。1901年から1906年までオルガン・作曲の研究のために文部省の命によりドイツに留学。帰国後、同校の勅任教授として後進の指導にあたる。

クリスチャンで、日本の西洋音楽黎明期における作曲家の第一人者。日本最初のオルガニストで、オルガン教科書の著書、文部省唱歌の編集や文部省視学委員等を務めた音楽教育面でも重要な存在であった。ちなみに島崎はC.K.ドージャーと同じ1933(昭和8)年に逝去した。享年59歳。

校歌の編曲者として 石丸 寛

島崎赤太郎先生作曲の校歌は、九州男児が歌うにふさわしい、明るく、格調の高いものです。私は編曲する喜びを感じながら、5分間ぐらいで編曲を終えました。メロディが実に自然な流れで出来ていて、四部の和声を付けるのに全く苦勞する必要が無かったのです。この校歌はテンポを変えて、ゆっくりと荘重に歌っても、また別の味わい深い美しさがあり、興味深い音楽性を秘めていると思われます。一般の学生諸君が歌うときは、ト調が適当かと思いますが、グリークラブのような歌専門のグループが歌うときは、短3度ぐらい上げて変口調で歌うのも良いのではないかと考えます。いずれにしても、歌い易く、自然で、格調のある美しい曲だと思います。

Ah Seinan !

words by Alma N. Graves

music by Hiroshi Ishimaru

Alla Marcia

T

'Neath the state-ly pines, By the o - cean blue,
 And the dear old cam - pus, With its friend-ly shade,
 Too soon we leave thy care, And part from friends so dear,

B

5

Stands our col - lege fine, To thee we'll be true, be true.
 Where sweet friends greet us, From our minds won't fade, won't fade.
 But all our fame we'll share, With o - ur Al - ma Ma - ter. Ah

9

S - E - I - N - A - N - Sei - nan. May thy sweet memries lin - ger long,
 Sei - nan! dear Sei - nan! May thy sweet memries lin - ger long, Ah

S - E - I - N - A - N Sei - nan. May thy sweet memries lin - ger long

13

S - E - I - N - A - N Sei - nan. For thee we will be true and strong.
 Sei - nan! dear Sei - nan! For thee we will be true and strong.

S - E - I - N - A - N Sei - nan. For thee we will be true and strong.

Ah Seinan!

'Neath the stately pines By the ocean blue,
Stands our college fine, To thee we'll be true, be true.
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Ah Seinan! dear Seinan! for thee we will be true and strong.

And the dear old campus, With its friendly shade
Where sweet friends greet us, From our minds won't fade, won't fade.
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Ah Seinan! dear Seinan! for thee we will be true and strong.

Too soon we leave thy care, And part from friends so dear,
But all our fame we'll share With our Alma Mater.
Ah Seinan! dear Seinan! may thy sweet memories linger long,
Ah Seinan! dear Seinan! for thee we will be true and strong.

A Graves

グレーヴス先生直筆の詩

Ah Seinan! 作詞/A. O'N. Graves 作曲/石丸 寛

- | | | |
|--------------------------|---|--|
| 1 | 'Neath the stately pines
By the ocean blue,
Stands our college fine,
To thee we'll be true, be true. | 聳ゆる松の許
碧き海近く
優美なる我らが学び舎建てり
汝に我らが忠誠を誓わん |
| < Refrain > | | |
| | Ah Seinan! dear Seinan!
May thy sweet mem'ries linger long;
Ah Seinan! dear Seinan!
For thee we will be true and strong. | 嗚呼 西南! 愛する西南!
汝の美しき思い出よ いつまでも残れかし
嗚呼 西南! 愛する西南!
汝がため我らは真にして強くあらなむ |
| 2 | And the dear old campus,
With its friendly shade
Where sweet friends greet us,
From our minds won't fade, won't fade. | 愛する懐かしきキャンパス
心地よき影をなし
親しき友とまみゆるところ
我らが胸より消え去ることなし |
| 3 | Too soon we leave thy care,
And part from friends so dear,
But all our fame we'll share
With our Alma Mater. | 汝が庇護のもとを去り
親しき友と別る時は疾く来たれり
されど 我らが名誉
共に分かつむ 母校と共に |

「岸を洗う 紺碧の波、松の緑 青春の色」・・・これは西南学院校歌の出だしである。「Ah Seinan!」作詞者グレーヴス先生はこのロケーションを見事に採り入れて、堂々と聳え立つ松の樹の傍に紺碧の海を臨むところ・・・に始まる英詩を作られた。” 'Neath the stately pines, by the ocean blue,” 西南グリーが初めて全国レベルの合唱コンクールに出場することになった時、同志社も関西学院も持っていたカレッジソングが我々には無いと気づき、グレーヴス先生に作詞を依頼し、出来上がった詩を石丸 寛氏に作曲依頼した。当時石丸氏は既に東京で活躍中であり極めて連絡が付き難い状態であった。そこでグレーヴス先生への連絡は自分が、石丸氏への連絡は私の親友であるフォーコインズの進藤邦彦(53期)が担当した。当時フォーコインズはダークダックスやボニージャックスと肩を並べる人気ボーカルグループでジャズ系統の曲を得意にしていた。

こうして漸くカレッジソング「Ah Seinan!」が誕生した。そしてもうひとつのしっとりとした母校愛を歌った「She Wants・・・」であるが、これはグレーヴス先生が温めておられたのではないかと思う。少し修正や校閲に時間を要したが、私が先生にお願いして余り日を置かずにこの詩を頂いた。これも同じように進藤氏を通して石丸氏に曲を依頼して出来上がった。

豊田佳日子(53期)

She Wants Brave Noble Men

words by Alma N. Graves

music by Hiroshi Ishimaru

Adagio Sostenuto

mp *mf*

I ought to love my school, Sei - nan in which I live; Yes,
if I love my school, I'll try to be a man; My

mp *mf*

5 *1. 2. poco*

I am sure my heart, It's tru-est love should give. For can. She
school may be proud of, And if I try, I

I am sure my heart, It's tru-est love should give. For can. She
school may be proud of, And if I try, I

10 *meno Adagio* *espr. f*

wants brave no - ble men, She needs men true and kind; My
kind; _____

14 *rit. dim.* *f* *dim.*

school needs me to be the best man she can find.
espr. f My school needs me to be the best man she can find.
dim.

She Wants Brave Noble Men

作詞／A. O'N. Graves 作曲／石丸 寛

I ought to love my school,
Seinan in which I live;
Yes, I am sure my heart,
It's truest love should give.

私は愛します わが母校を
私が日々を送る西南を
そうです 私は確信するのです
母校の真実の愛が授けられることを

For if I love my school,
I'll try to be a man;
My school may be proud of,
And if I try, I can.

母校を愛するというならば
私は「男」になるべく努めましょう
母校は私を誇りとしてくれるでしょう
私ができる限りの努力をするならば

She want' s brave noble men,
She needs men true and kind;
My school needs me to be
the best man she can find.

母校は勇ましく気高い「男」を望み
誠実で親切な「男」を求めています
我が母校は私に求めています
探し得る「最高の男」になれと

カレッジソングの思い出

あれは何時頃だったか、(まだ電気ホールもなかった頃)九大医学部講堂での合唱祭の帰りに、たまたま石丸寛氏と同じ電車に乗り合わせた。彼は「内海君、いい旋律が浮かんだので、何か歌詞がないかな？」と云われ、先輩の豊田佳日子氏に話したところ、彼が早速クラブ顧問のミス・グレイブスにお願いし、出来たのがあの二つのカレッジ・ソングである。

英語のカレッジ・ソングは多くの大学で歌われているが、リズムカルな「Ah Seinan!」と静かな「She Wants Brave Noble Men」と二種類のカレッジ・ソングを持つ大学は他にないと思う。

又、或時、演奏会にマザー・ドージャー(創立者C.K.ドージャー氏夫人)が見えられたので、早速、彼女の為にと行って「She Wants Brave Noble Men」を歌った。この曲の“She”は西南学院を指すのであるが、あの時の“She”はマザー・ドージャーを意識したものだった。

彼女は非常に喜ばれ、僕を干隈の宣教師館に招き、食事をして下さった。僕は恐縮のあまり、折角の手作りの西洋料理の味も覚えていないほどであった。

内海 敬三(54期)

※ マザー・ドージャー

当時の院長はC.K.ドージャー氏のご子息E.B.ドージャーで、ミセス・ドージャーといえはE.B.ドージャー夫人のことになるので、C.K.ドージャー夫人をマザー・ドージャーと呼称した。



Alma O'Norean Graves

アルマ・グレイブス先生は1938年本学の前身である高等学部(当時)教授となり、太平洋戦争直前に一時帰国、47年に復職、定年退職する76年まで文学部教授として教育研究にご尽力、68年に勲四等瑞宝章を受章、76年には名誉教授の称号を授与された。

戦前来日の折に、既に規定の日本語の勉強も終えており、日本語は堪能であったにもかかわらず、学生たちには必ず英語で話しかけられていた。学生の勉強、訓練のためと思われたからであろう、もちろんクラスでの授業は全部英語で講義された。

在任中は E.S.S.の学生にシェイクスピア劇(英語劇)を指導され通算25回の公演を行った。また、1951(昭和26)年毎日新聞社主催の学生英語弁論大会で豊田佳日子氏(グリークラブ53期)が見事優勝したが、E.S.S.のメンバーでもあった豊田氏とグレイブス先生の二人三脚で訓練に取り組んだ成果だった。これは当時の西南にとって大変嬉しいニュースであった。しかし、その時の優勝杯は間もなく盗難に遭い、泥棒が捕まった時にそれはもう溶かされて銀の一塊になってしまっていたという後日談までついている。

1976(昭和51)年に大勢の友人たち、卒業生たちに見送られて、69歳で故郷ルイジアナ州に帰られた。「もし40年前に自分の人生を巻き戻すことが許されるなら、もう一度同じように西南で働きたい」との言葉を残している。帰国されてからは再度日本の土を踏まれることなく、2000(平成12)年クリスマスの日故郷で亡くなられた。享年93歳。

“May thy sweet mem'ries linger long” (汝の楽しき思い出が長く続かんことを)

Seinan Gakuin Glee Club 100th anniversary

ごあいさつ





「百年の歩み」発刊のご挨拶

西南学院グリークラブ OB 会
会長 黒江 量二
Kuroe Ryohji

過去に敬意を表し未来に向かい努力しよう
Hats off to the past. Coats off to the future.

西南学院グリークラブには唯一のクラブ史として、創立 40 周年の際に発刊した「四十年の歩み」がありますが、その編集後記に、「何だか書き落とした事が山程ある様で本になるのが恐ろしい。でもこれが、何年か経って、又この様な本を出す時に、少しでも役に立ってくれば幸いだ」と、59 期生の松枝康匡氏 (2019 年 4 月逝去) が記述されています。

手許に一片の資料も無い中で編纂され、1960(昭和 35)年 12 月に発刊された先輩方のご苦勞は想像に難くありません。また、関係各位が寄せられた玉稿は時代背景も併せ日本の近代史の一部と言っても過言ではなく、貴重な資料でもあります。

この度の 100 周年誌発刊に当たりましては何にも増してお手本にさせていただきました。

私は 1961(昭和 36)年入学と同時にグリークラブに入部しましたので、出来立ての「四十年の歩み」をいただきましたが、今回大きな節目である「百年の歩み」の発刊にも携われる縁ができたことを大変光榮に存じております。

今回の発刊に当たりましては、出来るだけ分かりやすく、思い出を辿っていただけるよう心掛けました。時代とテーマを分けて、それぞれのエピソードをトピックスや物語として読みやすく編集しています。編集にあたっては、それぞれの時代に関わって頂いた皆さまからのご寄稿や、OB 各位に貴重な資料や写真の提供などのご協力をいただきました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さらに、現在 OB 会の顧問でもあります鈴木勸氏 (62 期生)、河野正海氏 (63 期生) の両氏には、企画当初の 2010 年度から記念誌編集の責任者として陣頭指揮をとっていただきました。ここに改めて、お二人の長きに亘るご努力とご熱意に厚く感謝の意を表する次第です。

社会環境の変化に加え、4 年間という在学期限と毎年メンバーが変わるとい部活動の制約により、部員数の拡大は思うように進みませんが、先の大戦と 2006 年には部員が零になるという二度の危機を乗り越え、合唱王国福岡で先駆者としての役割を果たしてきた大学男声合唱団、それが西南学院グリークラブです。

この先の 100 年も、希少な男声合唱の魅力を多くの皆さまに伝えるべく、学生諸君の不断の努力を期待するとともに、在学中グリーメンとしてひたむきに精進された OB 諸氏のご協力と叱咤激励をお願い申し上げ、発刊のご挨拶といたします。



祝 辞

西南学院大学

学長 G. W. バークレー

G. W. Barkley

西南学院グリークラブ創立 100 周年、併せて記念誌の刊行を心よりお慶び申し上げます。

また、グリークラブ OB の皆様方におかれましては、平素より大学及び現役生に対して格別のご指導ご支援を賜り、大学を代表し、厚くお礼申し上げます。

皆様もご存じのとおり、西南学院グリークラブは、1919 年の創部以来、戦前戦後の激動の時代の中で幾多の困難を乗り越え、学院の歴史と共に今日に至ってまいりました。特に、1990 年代には 100 名を超える部員を擁し、定期演奏会はもとより関西学院のグリークラブをはじめ、多くの他大学との交歓演奏会、国内外での演奏旅行、中でも 1985 年には日本を代表してヨーロッパカンタータに参加するなど、精力的な活動を通じてその美しいハーモニーを披露してこられました。2000 年代に入ると部員数が減少し、2006 年には部員 0 名という創部以来最大の危機にも直面しました。しかし、OB の皆様のご尽力により、2008 年からは徐々に部員数も増え、2011 年には定期演奏会が復活するまでになりました。そして、2019 年 9 月には、創立 100 周年記念事業として、アクロス福岡シンフォニーホールにおいて記念演奏会を開催され、現役部員の日々の練習の成果はもちろんのこと、現役時代を彷彿とさせる OB の皆様の歌声を多くの方々に披露されました。このように、様々な困難に直面しながらも、100 年もの長きに亘って活動が継続されてきたのは、ひとえにグリーのもつ魅力に加え、これまでグリークラブに携わってこられた関係者の皆様、そして何よりもグリーの演奏を支えて頂いた合唱愛好家の皆様のご支援の賜物であると思います。

このたびの創立 100 周年記念誌の刊行にあたっては、編纂活動をはじめとして大変なご苦勞があったことと存じますが、今回の記念誌が、OB の皆様や現役生、また、多くの関係者の方々にとって、西南学院グリークラブのこれまでの軌跡を振り返り、新たな伝統を築くための良き機会となることを切に願っております。

最後になりましたが、西南学院グリークラブを支えていただいている全ての皆様のご健勝と、グリークラブの今後の更なる発展を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。



祝 辞

西南学院大学同窓会

会長 岩 崎 文 正

Iwasaki Fumimasa

俺たちに続け リードするOB 心は「生涯現役」
とにかく全員が「超」のつく本気なんです

西南の体育、文化系クラブは大小50ほどあります。学院が創立から100年を超える年月を刻んでいますので、グリークラブをはじめ少なからず「百年クラブ」が出始めています。同窓会長としてたびたびそのお祝いの席に招かれますが、ほとんどの祝賀記念行事は、まず部の歴史を振り返り、先輩の功績を称え、万歳三唱で先輩、後輩の絆を確かめ合うというのが定番です。

とくに体育会系では、上座に大先輩がすわり、後輩が盃にお酒を注ぎ、それを受けた先輩が「がんばつとるごたるな」と後輩を気遣う構図です。先輩の多くは後輩に「孫」に近い眼差しで語りかけます。「和顔愛語」です。私は、これはこれで、伝統と歴史を感じさせる立派なものだと思いますし、体育会育ちとしても、全く違和感はありません。

西南学院グリークラブはどうか。これが、かなり変わっているのです。グリーの「創立百周年記念フェスティバル」(2019年9月22日開催)。OBやOB有志で構成する西南シャントウール、そして現役グリー、合わせて300人が1部、2部に分かれ、精選された曲目を演奏するわけですが、いずれも、数年にわたり練磨に練磨を重ねた作品です。現役は練習の場所も時間も自由度がありますが、OBのみなさんは並大抵のことではなかったようです。作品の仕上げに土日を費やし、とくに福岡から遠く離れた関東関西在住のOBのみなさんは、少人数単位でも寸暇を惜しんで練習を重ね、そのうえ博多での何回もの全体練習、これにもほぼ全員が馳せ参じられたそうです。

ですから、先輩も時には「先輩風」を吹かせることもあるのですが、OBのみなさんに通底した心根は「生涯現役」の精神のように思えます。そしてそれは、後輩に「負けちゃおれん」という勝ち負けのレベルをはるかに越えて、「俺たちに続け」という気迫に満ちた先輩魂だと感じ取りました。少し刺激的に言えば「ここまでおいで」と言っているのです。後輩が燃えないはずがありません。

この記念演奏会では、年代ごとにステージ上に並び、歌い終えるたびに次の世代に入れ替わっていくという、融和をイメージしたしゃれた演出もありました。その連綿と続く壇上での「世代交代」劇を眺めながら、つい百道浜に寄せては返す波を連想し、西南学院校歌の出だし「岸を洗う紺碧の波」を低く歌う自分がいました。「グリーは永遠だな」と思いました。



「西南学院グリークラブ創立百周年記念誌」発刊への祝辞

西南学院大学文学部

教授 武井 俊 詳

Takei Takayoshi

西南学院グリークラブ創立百周年の記念誌「百年の歩み」の発刊を敬意と感謝を込めてお祝い申し上げます。2019年に創部百周年を迎えられ、9月22日に福岡市が誇るアクロス福岡のシンフォニーホールでの記念演奏会を開催し、OBと現役学生グリーメンバー合同の300名余りが高らかに美しくそして力強いハーモニーで満席の聴衆を感動させ、魅了しましたことが昨日のように思われ、感涙と胸の高鳴を覚えます。

敬意は、その歴史に対して強く覚えます。文字通り波乱万丈の歴史でした。学院の発展と共に重なる演奏会の益々の盛り上がりが太平洋戦争のため活動中止を余儀なくされ、戦後の復活が部員僅か10名から。そして大学創立と共に部員も増え、著名な指導者にも恵まれての合唱コンクールでの優勝、1946~2000年代には関西学院グリークラブなどの大学男声合唱団と交歓演奏。さらには、1949年からは国内各地への演奏旅行や著名大学のグリークラブなどとの合同演奏に加え、韓国、米国、ヨーロッパなどへの海外演奏旅行など、部員数が三桁を超える順風満帆の時代を謳歌しました。ところが、2000年代になると、入部員が激減、2006年にはついに部員0。この難局を救ってくださったのが、刀根さんをはじめとするOBの方々の多大なる尽力でした。献身的ともいえるOB諸氏の貢献で、2008年に5名が入部、以来、徐々にではありましたが部員を増やすことができ、創部100周年記念演奏会をOBとともに開催できるグリークラブに復活したのです。

感謝は、この西南学院に無くてはならない合唱グループであるグリークラブの部長としてその活動に関与することができたことです。特に感謝と敬意を禁じ得えないのがOBの甚大な力です。即ち、OB会の結束力であり、学院への母校愛の力であり、合唱に対する熱烈で真摯な取り組みの情熱力であり、「これこそ西南スピリット！」です。その「西南スピリット」の象徴的なクラブに携われた幸運こそ、感謝に堪えないものです。

2020年という年は、文字通り世界の活動に急ブレーキがかかった1年でした。COVID19と命名されたコロナウイルスの世界的な蔓延でこの年予定のオリンピックをはじめほとんど全ての行事が中止を余儀なくされました。グリークラブの新入部員勧誘もままなりません。しかし、この難局も、是非乗り越えてください。これからも、現役は一層の精進をし、また、OBの方々には一層のご支援をくださって、西南学院グリークラブが益々旺盛に「西南スピリット」を歌い続けてください。

(西南学院グリークラブ部長)